

「せとうち発見の道」企画展

## 「瀬戸内市人物列伝 ～郷土の“偉人”とは?～」

2020年2月25日(火)～8月30日(日)

瀬戸内市民図書館

瀬戸内市にゆかりの人物として、これまで書籍などで多くの著名人が紹介されています。また、瀬戸内市名誉市民として認定されているのが、現在13人です。

今回の展示では、一部の人物については遺品などを展示しながら、どのような人物が郷土の“偉人”としてとりあげられてきたのかを再発見したいと思います。

### 瀬戸内市名誉市民

瀬戸内市では、「瀬戸内市名誉市民条例」および「瀬戸内市名誉市民条例施行規則」によって、現在までに、13人を名誉市民としています。

条例では、「市民または市に縁故の深い者で、公共の福祉を増進し、又は学術技芸の進展に寄与し、もって市民の生活及び文化に貢献し、その功績が卓絶で市民の尊敬を受けるものに対し、瀬戸内市名誉市民の称号を贈ることができる」としています。

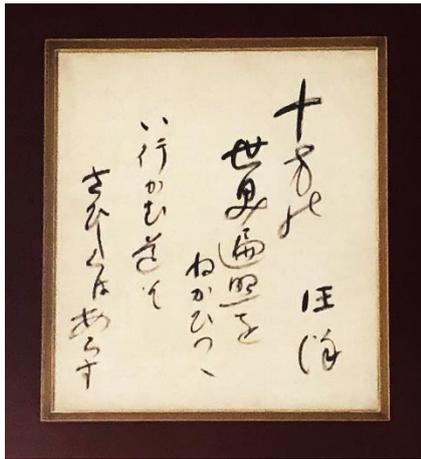
牛窓町、邑久町、長船町で名誉町民となっていた人は、瀬戸内市名誉市民として引き継がれています。

- 古武 弥四郎 (こたけ やしろ) 1879～1968 医化学者
- 光田 健輔 (みつだ けんすけ) 1876～1964 元長島愛生園長
- 奥田 真須二 (おくだ ますじ) 1882～1965 元邑久町長
- 戸田 高吉 (とだ たかきち) 1874～1979 教員、茶華道師範
- 今泉 濟 (いまいずみ わたる) 1898～1995 刀匠名：俊光
- 嘉数 郁衛 (かすう いくえ) 1899～1983 元邑久町長
- 岡本 隆郎 (おかもと たかお) 1923～1979 人形師 雅号：竹田喜之助
- 日下 連 (くさか むらじ) 1902～1992 医学博士、国立岡山病院名誉院長
- 平井 方策 (ひらい ほうさく) 1911～1997 医師
- 佐竹 徳次郎 (さたけ とくじろう) 1897～1998 洋画家 雅号：佐竹徳
- 服部 和一郎 (はっとり わいちろう) 1894～1989 実業家
- 緑川 洋一 (みどりかわ よういち) 1915～2001 写真家
- 森 才蔵 (もり さいぞう) 1937～ 備前焼作家 作家名：森陶岳



古武弥四郎の遺品  
(日本医師会最高優功賞の盾)

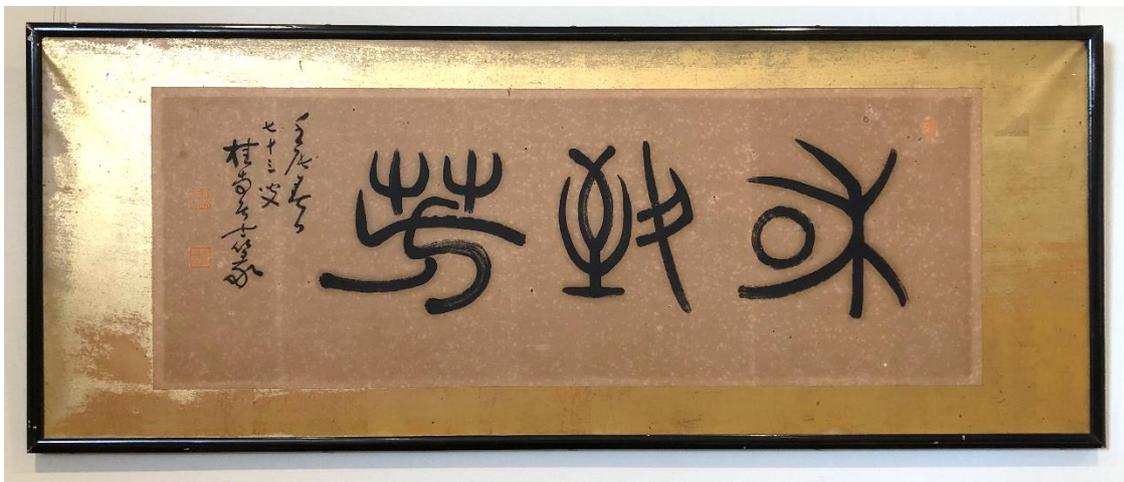
【瀬戸内市ゆかりの人物に関する資料紹介】



●正富汪洋の書

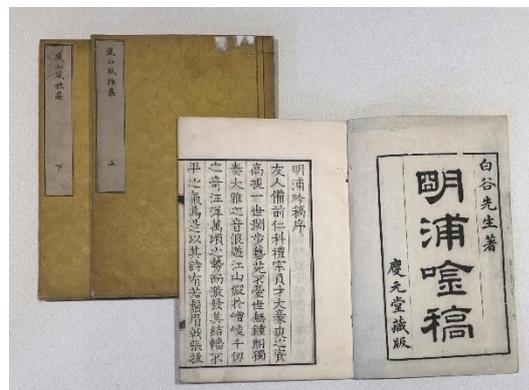
正富汪洋（まさとみ・おうよう）は、明治14年（1881）に現在の瀬戸内市邑久町本庄で生まれました。昭和3年（1928）、天皇の即位に伴う奉祝国民歌に応募して一等となり表彰を受けるなど、詩人として活躍し、1967年に逝去しました。

書は、「十方の 世界遍照をねがいつつ 一行かむ道そ さひしくはあらず」と書かれています。



●大原桂南の書

大原桂南（おおはら・けいなん）は、明治13年（1880）、現在の瀬戸内市邑久町下笠加で生まれました。岡山県を代表する書家として活躍し、『山陽新聞』の題字を揮ごうしたことで有名です。昭和36年（1961）逝去。書は「和致芳」と書かれています。



●仁科白谷の著書

仁科白谷（にしな・はっこく）は、寛政3年（1791）に現在の瀬戸内市邑久町虫明に生まれたと伝えられ、江戸時代の漢詩人として多くの著書を残しています。弘化2年（1845）逝去。

## 戦国時代の宇喜多氏

歴史上の人物ではどんな人が居るでしょうか。戦国時代（15 世紀後半～16 世紀末頃）の人物では、戦国大名となって備前地方を支配し、岡山城を築いた宇喜多直家（うきた・なおいえ）が、瀬戸内市ゆかりの人物として有名です。

宇喜多直家は、砥石城（瀬戸内市邑久町豊原）で生まれたと伝えられています。砥石城は直家の祖父とされる宇喜多能家（よしいえ）の居城でしたが、直家が幼い頃に落城したため、直家はどん底から大名にのし上がっていったことになります。

瀬戸内市は、そうした人物を生んだ地でもありました。

### ◆宇喜多一族（うきたいちぞく）

戦国時代（15 世紀後半～16 世紀末頃）に備前国南部を拠点にして、戦国大名に成長した一族。古い時代の人物は不明な部分が多いのですが、砥石城（といしじょう、瀬戸内市邑久町豊原）を隠居後の居城にした宇喜多能家（よしいえ）は、備前国守護代・浦上氏配下の有力な武将でした。

直家（なおいえ）は砥石城で生まれたと伝えられ、戦国大名として大きく成長し、岡山城を築きました。秀家（ひでいえ）は天下人豊臣秀吉にかわいがられ、豊臣政権下で五大老の一人となりましたが、慶長5年（1600）関が原の合戦で徳川家康率いる東軍に敗れ、八丈島に島流しとなりました。

### ◆宇喜多能家（うきた・よしいえ） ? ～ 天文3年（1534）

戦国時代の武将。和泉守（いずみのかみ）を称しました。浦上則宗（うらかみ・のりむね）・村宗（むらむね）に仕え浦上家を支えました。その勇名は天下にとどろきましたが、合戦で息子を失ったのち砥石城（瀬戸内市邑久町豊原）に隠退、常玖（じょうきゅう）と号しました。天文3年（1534）、隣接する高取山城（たかとりやまじょう）の城主で浦上家臣・島村豊後守（しまむらぶんごのかみ）に不意打ちされ、自害したと伝えられています。

### ◆宇喜多直家（うきた・なおいえ） 享禄2年～天正9年（1529～1581）

戦国時代の武将。幼名八郎。元服して三郎左衛門（さぶろうざえもん）、のち和泉守（いずみのかみ）を称しました。砥石城落城の際、父興家（おきいえ）とともに落ち延び、笠加（かさか）の尼寺（瀬戸内市邑久町下笠加付近か）で伯母に養われたと伝えられています。浦上宗景に仕え、多くの合戦と知略で勢力を拡大し、浦上氏をも凌駕して備前・美作を統一、岡山城を居城としました。天文9年（1581）毛利軍との合戦の最中に病死したと伝えられています。

謀略を多く用いたため「梟雄（きょうゆう）」とも評されるますが、戦国乱世を生き抜いた武将として再評価が進んでいます。



宇喜多直家像（光珍寺旧蔵）

◆紅糸素懸威銀箔押二枚胴具足（べにいとすがけおどしぎんぱくおしにまいどうぐそく）

大賀島寺所蔵・岡山県指定重要文化財

通称「与太郎甲冑（よたろうかっちゅう）」。具足とともに伝わる「宇喜多与太郎元家甲冑記」（山脇貞尚筆、1746年）によると、宇喜多直家の甥とされる基家が、毛利軍と戦った児島八浜合戦の際に着用していたものといえます。「当世具足（とうせいぐそく）」初期の特徴を持っています。1994年、森崎昌弘氏（指定甲冑師）により保存修理が行われ、当時の姿に再現されました。



〔法量・様式〕 総高 121cm

胴高 34cm 胴廻り 87cm 兜高 35cm

鉢高 27cm 鉢前後幅 24cm 鉢左右幅 19cm

胴は二枚胴蝶番（ちょうつがい）で一枚の薄鉄の上に美濃紙を着せ、その上から黒漆を塗り銀溜塗りとし紅糸威（べにいとおどし）とする。草摺（くさずり）は六間四段下り。佩盾（はいだて）は四段下りで銀溜塗を施す。兜（かぶと）は烏帽子形（えぼしなり）で、鉄地に金箔押を施し、鍔（しころ）は五段下りとなる。籠手（こて）は鉄朱漆塗。頬当（ほおあて）は垂れ三段下り銀箔押である。



←砥石城跡



「宇喜多直家生誕之地」碑↑  
（砥石城東登山口）



←宇喜多一門供養之塔  
（大賀島寺境内）

1989年（平成元）、地元有志によって建立された